

中学生内申絶対評価の影響 その2

先月に続き来年度からの中学絶対評価移行に関する考察です。

まず本当に「絶対評価」が可能かということですが、難しいのはその基準設定と学校間差・教師間差のない評価の実施でしょう。基準設定は、まだ文部省の指導要領をもとにどういう問題までできれば「5」にするかを定めることは可能かもしれませんが、もちろん内容がどんどん簡単になっていますので、従来よりも簡単に「5」が取れるようになるかもしれません。しかしもっと問題なのは、実際に評価する学校・教師が厳密にそれに従って評価をしてくれるかということです。場合によってはほぼ全員が「3」以下の評価になる点数しか取れない学校もでてくるでしょう。高校のように「1」がついたら“赤点落第”にするのでしょうか。「みんなに「5」を取ってもらいたい」と夢見ている“やさしい”先生にもそれができるか疑問です。

「相対評価」ならその学校内の評定ですから、学校ごとのテストによる評価でも構いませんが、「絶対評価」なら本来全県全中学共通テストにして評定を決めるのが最も平等でしょうが、これは全学年で高校入試以上の作業を年6回も行なうことになるため、あまりにも非現実的です。

結局は完全な「絶対評価」は困難で、各学校ごとの裁量にまかされた評価にならざるを得ません。では何も変わらないかということとそうではありません。おそらく全体の評価が上がるでしょう。つまりみんな評定がアップします。これは現在の小学校の通知表をみれば明らかです。「よくできる」ばかりで、「がんばりましょう」は圧倒的に少ない。昔より学力が低下している現状をみれば、結局これは単に「げたを履かせた」だけであることも明らかです。

しかし問題はこれを高校入試に使うということ。この絶対評価を従来の高校入試制度に使った場合、ほとんどの高校は内申点のボーダーが上昇します。現状でも内申点合計が40以上は必要な名古屋市内の高校などは、おそらくオール「5」でなければ受けることも困難になるでしょう。もちろん内申点に差がありませんので、合否は当日点のみ（実力）となるでしょう。ただ、2番手・3番手高校の場合は予想が難しくなります。見かけ上内申点のボーダーは上がるでしょうが、それだけの実力はない受験者が増えるでしょう。結局高校側としても内申点より当日点重視にならざるを得なくなるでしょう。

したがって、上位校を目指す人は、今まで以上に9科目すべてに弱点を作らないこと、特に5科目は「5」に安心せずに実力をつける問題により積極的に取り組むことが必要になります。地元高校を目指す人も、内申点が届かなければ現在の入試制度では確実に落ちますので、おそらく上昇するであろう内申ボーダーはクリアする必要があります。特にここ2・3年は安全圏が読めませんので、ぎりぎりの受験は非常に危険を伴います。そのうえで当日点をとる実力を養う必要があります。

高校入試は現在の中1の受験からの導入のようですが、何年かはかなりごたつくことは確かです。